

## 普遍の存在と普遍語の諸特性 : Porphyriusの問いへのBoethiusとAbaelardusの解答

永嶋, 哲也  
福岡県立大学 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/1430795>

---

出版情報 : 哲学論文集. 33, pp.63-80, 1997-09-25. 九州大学哲学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 普遍の存在と普遍語の諸特性

—— Porphyrius の問答への Boethius と Abaelardus の解答 ——

永嶋 哲也

まえがき

我々の用いる言葉の中では、一般名というものがその多くを占める。我々は当然「一般的なる存在者」など経験したことがないにもかかわらず、それらの名称をいとも容易に用いることができる。我々が経験することのできる数え切れないほど多くの諸個物、それらのほとんどについて、不可分に付いてまわる一般性。我々が経験できるのはごく限られた数の個物であるにもかかわらず、それらからほとんど苦労もなくその一般性へと飛躍できているのである。このような「一般」というありふれていて、しかも謎に満ちた存在は、(当然のことなかもしれないが)哲学史上、様々な哲学者たちによって様々な形で問題とされ続けてきた。

そういう哲学者たちの営みの中にいくつかの頂点を見出すならば、そのひとつが西ヨーロッパ中世初期にあるということ

は衆目の一致するところであろう。しかし、「普遍論争」と通常整理されるこのような営みにおいて、当時ヨーロッパを代表する知性たちが一体何を行ったか？このことに関する正確な理解は今なお不十分であり、その不十分さ故に、普遍論争が「中世哲学を覆い隠してきたもの」とさえ表現されるほどである。いやむしろ、今世紀後半になって当時の知的営みに関する文献学上・歴史学上のめざましい研究成果が提出されている状況を考えれば、当時の普遍論争という営みを正しく解釈するのは、それらの成果を手にするのできる現代の我々こそがやるべき仕事であると言うべきであるのかもしれない。

古代末期、アリストテレスの論理学書に対する入門書を書いたポルフェリウスはその入門書において、普遍は存在するのか、それとも…と問題を提起しながらも、それが入門書には高度すぎるからという理由で解答を避けている。中世初期の普遍論争において「論争の場」としての役割を果たしたこの「ポルフェリウスの問い」に対して、「旧論理学の頂点」とも形容される<sup>2</sup> アベラルドゥスはどのように答えているだろうか？

ポルフェリウス『イサゴゲー』に対してアベラルドゥスが記した註解書の中では中期著作とも言われるべき *Glossae super Porphyrium*<sup>3</sup> は、中世初期の普遍論争を論じる際に、必ずと言っていいほど言及される文献である。しかし、ある意味ではきわめて奇妙なことであるが、アベラルドゥスの普遍論が展開されているとして主に紹介されるのは、むしろポルフェリウスの問いに答えるために彼が行っている予備的考察 (*Glossae sup. Por.*, 9: 12-27: 34) の方であり、それらの問いに直接答えている箇所 (*Glossae sup. Por.*, 27: 35-29: 38) はあまり取り上げられない。その理由の一つとしては、予備的考察に於いての方が、より体系的に普遍について論じているという事が挙げられるだろうが、しかし別の理由としては、問いに答えている箇所が難解であるということも指摘できる。実際彼は、それらの問題を別の形で問い直し、表示の問題を導入してくる。そして彼は、我々の目をくらませるかのようになり、いわゆる「プラトニズム」の考え方にさえ言及しているのである。

本小論は、その難解で知られる箇所を、彼の直接の源泉であるボエティウスによる学説と比較することによって解説し、そこにおいて展開されている学説が持つ意味を明らかにするものである。そしてそのことによつて、中世初期の普遍論争と

いう営みを正しく解釈するという哲学的事業に貢献することを目指すものである。

## 一、ポエティウスの解答

### 1.1 — ポエティウスによる紹介・解説

最初に、問題の箇所について、そもそも問題となる部分はどのような仕方提示されているか見、そしてそれが通常どのように解されるかをまず確認しておくのがよいだろう。『第二註解』でのポエティウスによるポルフュリウスのラテン語訳から引用しよう。

(類種が)subsistereするのか、それとも単に純粹な理解(intellectus)のうちにあるだけなのか? またsubsistereするものとしても、物体であるのか、非物体的な物であるのか? また感覚対象から切り離されてあるものなのか、それとも感覚対象のうちにこれらに依存しつつ置かれるものなのか?<sup>4</sup>

そしてこれらの問いのうち第一のものをポエティウスは初期の著作である、『第一註解』で

類種それ自体は、真なるものとして在るのか、それとも単に理解のうちに、むき出しで空虚なものとして描き上げられるのか。

と解説している。第一問が普遍に関して「存在」か「概念内のみの存在」偽存在」かと問うている、と解するこの第一註解

でのポエティウスの解釈は、通常見られる常識的な解説だろう。

しかし、『第二註解』でポエティウスは、このような解説の仕方とは距離を置いている。次に『第二註解』での彼の解説を見てみよう。彼は第一問に関して次のように説明する。

それらのうちの最初の問題はこうである。精神が理解するものに関してはずべて、実在の側に確立されているものを理解によって把握して理性によってそれ自身に記述するか、そうではないものをそれ自身に空虚な想像力(imaginatio)で描き上げるかのいずれかである。ゆえに類やその他のものの理解がいずれの種類に属するか問われることになる。つまり我々は類や種を、存在するそれとして、つまり我々が真なる理解をそれから掴むところのそれとして理解するのか、それとも我々自身が自らをあざむいているのか(存在せぬものを我々に対して精神の空虚な思考によって形成するのである。(In Porph. II, 160 : 2-10)

つまりここで彼は第一問に関して「存在&真なる理解」対「偽なる思考&非存在」の対比<sup>7</sup>を導入してきている。

ポエティウスが普遍問題解決に関して、このように通常なされる解説の仕方と距離を置いたということは、その変化が微妙であることゆえに、ともすれば見落とされがちなのであるが、しかし彼の挙げる普遍に関する問題点を眺めれば、このわずかな修正が見過ごしてはならない重要な点であることが分かる。

## 1.2 — ポエティウスによる問題指摘

『第二註解』におけるポエティウスは、普遍問題の紹介・解説の後、問題の解答へ入る前に、普遍が存在することに關する難点を詳述している。

まず彼が行うのは、ポルフェリウスの第一問、最初の選択肢を選べば不都合が生じるということの、つまりいわゆる「一かつ多のジレンマ」の指摘である。即ち普遍が存在するならば数的に一でなければならぬと同時に多（多くのものに共通）でなければならぬので、一かつ多なら矛盾するため存在し得ない、と彼は指摘する。そしてさらに、それでももし存在するとした場合、普遍が複合的なら無限遡行に陥り、数的に一ならば共通であり得ないので、やはり不都合が生じると言う。

(*In Porphy. II*, 161: 14-163: 6)

もっともポエティウスはだからといって、第一問の後者の選択肢を取るべきだと主張しているわけではない。つまり、理解において普遍がある場合、それが真なる理解ならば（つまり事物が実際にあるとおりの理解であるならば）直前の段落で述べた難点がそのまま当てはまり、もしそうでないような偽なる理解であれば（ただ単に cogitatio の産物にすぎないのであれば）普遍の内実はむなしくなり、『イサゴージェ』の行っている探求自体が無意味なものとなる、と言うのである。(In Porphy. II, 163: 6-164: 2)

### 1.3 — ポエティウスによる解答

これらの難点を伴う普遍問題をポエティウスはどのように解決するのか？彼の解答を概観したい。

彼はまず現実と対応していない理解から論じ始める。想像力が勝手にねつ造したそれは偽なる理解であり、むしろ臆見であるが、抽象による理解はその在り方が現実とは異なっているものの偽とはならない、と説明する(*In Porphy. II*, 164: 5-165: 1)。——即ち、ここではポエティウスが真理と存在に対応関係を見て取っていることを押さえておかなければならない。つまり彼は、普遍の理解は抽象によるので現実と在り方が異なっても真であり、その理解が「真である」からには普遍は「存在する」と言えるのだ、と第一問に答えているのである。

次に彼は、現実には物体のうちにある非物体的な natura を、感覚は物体との混合物として受け取るが、精神はその natura

それだけを物体を伴わずに見る、と抽象の手続きを解説する(*In Porph. II*, 165:1-165:8)。物体なしには存在し得ないにもかかわらず、物体なしのものとして捉える、抽象による理解は実在とそのあり方を同じくしていなくとも構わないのである(*In Porph. II*, 165:8-166:6)。——即ち、彼はここで、「第二問に対して「非物体的」と答えているのである。とはいいえ

この場合、精神において非物体的なものとして捉えられた理解としての普遍を指して「非物体的」と言っているのである。そして、現実の事象においては感覚対象となる物体においてのみ普遍はある、と述べられた上で、各々の間では似ていない個々のものから類似という事態(*similitudo*)を精神が集約して見て取り、そしてその結果の*cognitio*が普遍となる、と説明される(*In Porph. II*, 166:6-167:7)。——即ち、第三問に対して彼は、普遍が「subsistereするのは感覚可能なものにおいて」と答えている。しかし何か「もの」的な存在者として普遍が個々物のうちに存在するのではなく、感覚対象である個物について普遍の理解が真となるということである。人という種を例に取って説明するならばこうである。例えば次郎が、太郎や花子から人の理解を持つ場合、彼は似ても似つかない太郎と花子に「人である」という事態を見て取る(「人である」という事態の成立という点で各個人が似ているのである)。この事態が精神によって思惟されて、真なる理解が形成される。この真なる理解こそポエティウスの言う種なのである。<sup>8</sup>

言ってみれば、彼は、精神のうちに一なる普遍を置き、無数に多く存在する個物においてその普遍があるということを、<sup>9</sup>その個物において普遍の理解が真である<sup>10</sup>ということを補い、一かつ多の問題を解決しようとしたのである。そしてその場合、その真を支えるのが、「類似という事態」である。<sup>9</sup>

## 二、アペラルドゥスの解答

### 2.1 — アペラルドゥスによる紹介・解説

しかしアペラルドゥスになると、同じくポルフェリウスのテキストを対象として普遍問題を論じていても、しかも問題を扱う直接の源泉としてポエティウスの註解書を利用していても、彼の問題解決法はポエティウスとは大きく異なる。彼の中期の著作『*Glossae super Porphyrium*』において、彼がポルフェリウスの問いに如何に答えているか見ていこう。

この著作においてアペラルドゥスは、最初はこれら三つの問いを常識的な仕方で紹介している（『*Glossae sup. Por.*」, 7: 34.8:4）。例えば彼は、第一問を「真の存在を有するのか、それともただ臆見のうちにのみあるのか」という仕方で、「普遍の存在」の問題として紹介している。<sup>12</sup>

次に彼はこれらの問題を解くために、「何が普遍であるか」等の問題に関する考察をまず行っている（『*Glossae sup. Por.*」, 9: 12-27: 34）。——『研究者たちによつて主に紹介される予備的考察』という上述の箇所はこの部分である。すなわち、彼は、普遍を言葉の側のみ認める立場と物にも認める立場とを紹介して、そのいずれなのかと問題を立てる。そして後者の選択肢をとる立場（シャンポーのギョームが取っていた立場であると推察されている）を具体的に紹介して論駁を加え、「物は……普遍的だとは言われ得ない」（『*Glossae sup. Por.*」, 16: 19-20）と結論して、彼は言葉の側のみ普遍性を認める。それから、普遍たることばがいかなる仕方でも諸個物を表示するかという問題などの、普遍語の諸特性の考察が行われている。そして、ポルフェリウスによつて提起された問題の解答へと移るのは、その後なのである。では次に、その解答の箇所を詳細に追つてゆきたい。



## 2.2 — アペラルドゥスによる第一問への解答

まず第一問に関して彼はポルフェリウスの表現を次のように言い換える。

「類や種はsubsistereしているのか」即ち「類種は」真にexistereしている何かを表示しているのか、「それとも独立…の理解のうちに置かれているのか」つまり事物を伴わない空虚な臆見(opinio cassa)のうちに置かれるのか、すなわちキマエラヤヒルコケルヴス「山羊鹿」という名称と同様、正常な知性認識(intelligentia)を生み出さないものであるのかという問題である。(Glossae sup. Por., 27:39-28:2)

この部分から指摘できることはまず、ポエティウスにおいて認識の真偽の場面で扱われていた普遍存在の問題が、アペラルドゥスにおいては言語の場面へと、すなわち表示の虚実の場面へと移されているということであろう。

そして指摘できるもう一点としては、通常は一つの問いとして解される第一問が、普遍は真にexistereしている何かを表示しているのか、そうではないのかと、正常な知性認識(intelligentia)を生み出さないものであるのか、そうではないのか、という二つの問題に分解して<sup>13</sup>解説されている点であろう。そしてその後には彼は、

実際「類種は」、名指すはたらきによって真にexistereする諸物を、すなわち諸々の個人的名称が「表示するの」と同じものを、表示する。そして決して空虚な臆見の内には置かれず、むしろ既に限定されたように、何らかの仕方で孤立であらわて純粋な(solus et nudus et purus)理解において持続する。(Glossae sup. Por., 28:3-6)

と言っている。ここで彼が行っているのはintellectusの差別化である。偽である“opinio”と真である“intellectus”とを区別し

ようということである。——しかしこれはどうだろう？ポエティウスが「第二註解」で行ったことではないか。ポエティウスは、ポルフェリウスのテキストではただ単に「理解」とだけなっていたのを、真なるそれと偽なるそれとに分け、前者を存在に、後者を偽存在に対応させた。要するに、ポルフェリウスの第一問に対して、「普遍は存在し、その理解は真である」と答えたのである。

ポエティウスとの関連を踏まえ、直前に述べた、第一問が二つの問いに分解されている点も見てみよう。そうすれば、もし第一問を（通俗的理解でそうなされるように）二つの選択肢が互いに排他的な一つの問いであると解した場合に、先に指摘したようなポエティウスのような解答は許されなくなるということに気が付くだろう。逆に言えば、ポエティウスの行ったような解答が許されるためには、むしろアペラルドゥスのように第一問を受け取らなくてはならない。

第一問においては、以上の二点が、ポエティウスからアペラルドゥスが受け継いでいる事として指摘できるが、逆に大きく異なるのはどこか？一見して分かるように、「普遍が存在するか」の問題を「普遍語の表示対象が存在するか」の問題に置き換え<sup>14</sup>、さらに「普遍の表示対象は個の表示対象と同じ」としている点である。確かに、「普遍語の表示対象である普遍的なモノは存在するか？」と問うことは哲学の常套手段であろうが、しかし（既述の通り）彼はここに先立つ文脈で「普遍的なモノは存在し得ない」と論証しており、当然ここで彼はそのような仕方では問題を扱ってない。普遍語の表示対象は現に存在しているものであり、だから個物だと答える。それゆえ次に、その普遍語と諸個物との関係が問題となってくる。

### 2.3 — アペラルドゥスによる第二問への解答

まず彼は、第一問の時と同じように問題を表示の場面に移し、「普遍が物的か非物的か」という第二問を、「普遍が物的なものを表示するのか、それとも非物的なものを表示するのか」という問題へ言い換えて解説している<sup>15</sup>。このように解説した場合、第一問で「諸々の個的名称が表示するのと同じものを、表示する」と答えた以上、当然、普遍は物的なもの

のを表示するということになろう。だがしかし、彼はそうは答えない。

この間に答える前に彼は、「**物体的・非物体的**」の意味を三つ列挙し、そのうち三つ目の意味（つまり「**物体的**」を「**個々別々の**」で受け取る）が最も適切であろうと言う。そしてその場合に第二問がさらに「**個々別々なもの**」を表示するのか、それとも個々別々でないものを表示するのかというように言い換えられると主張する<sup>16</sup>。——そしてさらに彼は、第一問から第二問へという論述の流れからして「**物体的・非物体的**」の区分が、「**存在するもの**」をちょうど二分するサブクラスであるべきことを指摘し(*Glossae sup. Por. . . 28 : 32-37*)、第二問がまた「**存在するもの**」のうち或るものは**物体的**と言われ、別の或るものは**非物体的**と言われると私は思うが、それらのうちのどちらを我々は、普遍によって表示されているものであると言うのか」(*Glossae sup. Por. . . 28 : 38-40*)と言ひ換えられると指摘する。

しかる後に彼は第二問に対して、「次のように、**物体的**でもあり、**非物体的**でもある」と答える。

それに対して次の様に答えられる。「**普遍**により表示されるものは」或る意味では**物体的**なもの、即ちその**存在者**(*essentia*)という点では**個々別々のもの**である、そして**普遍的名称**を持つ**指示の働き**(*notatio*)に関する限りでは**非物体的**なものであり、すなわちそれら**存在するもの**を「**普遍的名称**」(上で我々が充分に説いたように)個々別々の**確定した仕方**で(*discrete ac determinate*)ではなく一まとめという仕方で(*confuse*)**名指す**、と。それゆえ**普遍的名称**それ自身も、**物の在り方**(*natura rerum*)に関する限りでは**物体的**と言われると同時に、**表示作用の様態**(*modus significationis*)に関する限りでは**非物体的**と言われる。つまり「**普遍的名称**」**個々別々のもの**を**名指す**が、それでも**個々別々の確定した仕方**ではないのである。( *Glossae sup. Por. . . 28 : 40-29 : 7* )

ここで主張されていることの中身は一読しただけでは把握しがたいのではないだろうか。不注意に読めば、アベラルドウス

が「普遍の表示対象は、存在する何らか非物理的なものでもある」と主張しているとも受け取りかねない。しかしそう読んではならない。彼の主張は即ち、普遍が表示する対象は「個々別々のもの」であるので「物理的」と答えられ、そしてその働きに関しては「個々別々の確定した仕方で」(discrete ac determinate)ではなく、「一緒にまとめてという仕方で」(confuse)なので、「非物理的」だということであろう。

通俗的な受け取り方ならば、第三問が「感覚対象となるものうちにあるか、そうではないか」ということを論じている以上、第二問に対する解答は「非物理的」とならねば、次の問が無意味になるであろう<sup>13</sup>。しかし、彼が第二問に対する解答で「非物理的」と言う場合は、その意味あい異なる。第一問で「普遍語の表示対象である個物が存在する」とした後に、その普遍と個物がどのような仕方の表示作用で結ばれているかを、「非物理的」という用語を用いて表現しているのである。

#### 2.4 — アペラルドウスによる第三問への解答

第三問はまず、第二問との関係が語られて議論が始まる。「第三の問題……は、非物理的なものが受け入れられるということから派生してくる」(Glossae sup. Por., 29:8-9)と述べ、次にその理由として「或の意味で受け取られる非物理的なものは、感覚対象となり得るものにおいて在るか無いかによって分けられるから」(Glossae sup. Por., 29:9-10)と書いている。しかし彼がここで「非物理的」という用語で「表示作用の様態」を語っているのならば、そのようなものが「感覚対象となり得るものにおいて在る」とは奇妙な話である。しかも彼は次のように言って我々をもっと当惑させる。

そして普遍は感覚対象となり得るものの中にsubsistereると言われるが、それは即ち、感覚対象となり得る物の内にexistereしているもので外的形相からすれば内的である実体を表示することである。そして「種類は」actualiterには感覚対象となり得る物の内にsubsistereする実体を表示するが、しかしさらに、上の箇所ではプラトンに従って確定したように<sup>14</sup> naturaliter

には感覺対象となり得る物から切り離されているその実体をdemonstrare<sup>18</sup>。(Glossae sup. Por., 29 : 11-16)

この箇所も一読では理解しがたく、ともすれば、彼が哲学史上有名な二つの普遍実在論を主張しているかのようによめてしまう。つまり個物のうちに普遍的な実体があつて、その実体を普遍が表示すると主張する普遍実在論と、諸個物があるのは別のところに何か普遍的な実体が存在して、その実体を普遍が表示するという普遍実在論である。しかしそのように解した場合、予備的考察において彼が展開した普遍実在論批判(Glossae sup. Por., 10 : 8-16 : 18)と矛盾してしまうだろう。もつとも、後者のような普遍実在論の嫌疑に関しては、<sup>19</sup>彼はsignificareとdemonstrareとを区別しているので、このような立場は彼の主張に抵触しない<sup>20</sup>と言ふことができよう。だが、前者のそれはそういきそうもない。しかも彼はこう続けている。

それゆえポエティウスが「類種は感覺対象となり得るものなしに理解されるが、そのように存在するのではない」と言うのは、物としての類や種(res generum et specierum)はそのnaturaに関する限り理性こそ捉え得る仕方である(rationabiliter)、つまり如何なる感覺性もなしに、それそのものとして考察されることゆえにである。つまり、類や種は、外的な形相(そこを通じて「類・種が」感覺へと至る)が取り除かれても、それ自身において真にsubsistereし得る「と考察される」ことゆえにである。事実我々は、すべての類や種が感覺対象となり得る物に内属することを受け入れてゐる。(Glossae sup. Por., 29 : 16-21)

この箇所はさらにまして我々を困惑させる。つまり彼はこの引用箇所の後半で「類や種が感覺対象となり得る物に内属する」と明言してしまつてさえている。だがしかし、第三問の考察を終える直前に至つて彼はやつと次のようにつけ加えている。

だがしかし、それは、類・種の理解が常に感覚にのみ由来すると言われていたからであって、「類・種が」感覚対象となり得る物のうちにあると思われたからでは決してない。(Glossae sup. Por., 29: 21-23)

ここで我々は初めて先の引用箇所(Glossae sup. Por., 29: 11-16; 16-21)をどのように読むべきか知ることになる。そこで行われているのはあくまで認識の場面での考察なのである。即ち、「感覚対象となり得る物の内にexistereしている実体を表示する」「感覚対象となりうるもののうちに普遍がsubsistereする」と言われていたことの内実は、「普遍の理解、つまり普遍語が聞き手のうちに作り出す理解が常に感覚に由来する」ということなのである。さらに「第三の問題は、非物体的なものが受け入れられるということから派生してくる」と彼の言葉があることからすればここで問われているのは諸個物と普遍語の關係なのであり、両者の關係を表示の場面で扱った第二問に対して、第三問ではその三者にさらに認識を加えて、諸個物と普遍語の關わりを説明していることが見て取れよう。

### 三、結びにかえて

そもそもポルフェリウスが立てた問題において問われているのは「普遍の存在」であつたと言えよう。即ち「普遍は在るのか?」「普遍は如何に在るのか?」「普遍は何に在るのか?」である。

その問題に対してボエティウスは、抽象による認識の真偽を持ち込んできた。彼において「普遍の存在」の問題は、「普遍の認識は真であるのか?」「普遍は如何なるものとして認識されるのか?」「普遍は何において認識されるのか?」となつたと言えよう。とはいえ、彼はあくまで認識の問題を持ち込んだのであつて、認識の問題へ置き換えたのではない。即ち、諸個物から抽象を介して普遍の認識が成立するとき、その認識が偽とはならないことを論証することで、個物の存在様式とは

異なる存在様式が成立することを明らかにしようとしたのであって、彼が「普遍の認識」の場で問うているのはあくまで「普遍の存在」の問題である。

ところがアベラルドゥスの場合はそうではない<sup>20</sup>。彼において「普遍」の問題は、「普遍語は存在するもの（個物）を表示するか？」、「普遍語は如何なる仕方ですべて個物を表示するのか？」、「普遍語の生み出す理解は何に由来するのか？」となつてしまつた。ここで彼が明らかにしようとしているのは、「普遍の存在」ではなく、言つてみれば「普遍語の諸特性」である。彼は紛らわしい言葉遣いをして我々を惑わせるものの、「モノ的な存在者としての普遍的な何かは存在しない」という主張は常に一貫している。つまり彼は第三問に答えるとき、ポエティウスと同じように認識の場面で問題を扱おうとするが、我々は既に見たとおり、アベラルドゥスにおいてはあくまで普遍の存在は問題とされていぬ。似たような場面で考察が行われていても、彼にとつてあくまで普遍は「ことば」であつて<sup>21</sup>、その存在は問題とはなり得ないのである。

## 註

- 1 山内志朗『普遍論争 近代の源流としての』、哲学書房、一九九二年。
- 2 M. M. TWEEDALE, 'Abelard and the culmination of the old logic,' in *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy*, 1982 pp. 143-157.
- 3 *Logica 'Ingredientibus'*, hrsg. B. GEYER (*Beiträge zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters* Bd. 21 Heft 1, 1919).
- 4 A. M. Sev. Boethii in *Isagogen Porphyrii Commentariorum editio II*, ed. Samuel BRANDT, Vindobonae 1906 (*Corpus script. eccl. lat.* vol. 48), p. 159 : 4-7 : 'sive subsistunt sive in solis nudisque intellectibus posita sunt sive subsistentia corporalia sunt an incorporalia et utrum separata a sensibilibus an in sensibilibus posita et circa ea con-

- stantia....
- 5 L. M. de RIJKは『第二註解』を五〇四—五〇五年と、『第二註解』を五〇七—五〇九年と推定している。 Cf. L. M. de RIJK, 'The Chronology of Boethius' Works on Logic,' in *Vivarium*, 1964 pp.1-49; 125-162.
  - 6 A. M. Sev. Boethii in *Isagogen Porphyrii Commentariorum editio I*, ed. Samuel BRANDT (*Corpus scripti. eccl. lat.*, vol.48) p.24 : 11-12 : 'utrum genera ipsa et species verae sint, an in solis intellectibus, nuda inanique fin-gantur'.
  - 7 ここに指摘した点は『第一註解』でも言及はされている。しかし『第二註解』においてほどはつきりとした形ではなく、彼が提出しようとした解答において効果的な働きは演じていない。 Cf. *In Porph. I.*, pp.24 : 10-26 : 15.
  - 8 彼は解答最後の部分で次のように自らの解答をまとめている。  
*In Porph. II.*, 167 : 8-12 : 「問題一に対して」類種自体が subsistereするのと、理解されるのとは様態が異なる。[問題二に対して]そしてそれらは非物体的であるが、「問題三に対して」感覚可能なものと結びついているので subsistereするのは感覚可能なものにおいてである。しかしそれらが理解されるのはそれ自身で subsistereするものとしてであり、他のものにおいてその存在を有するものとしてではない。
  - 9 この点に関して詳しくは、次の拙論を参照。永嶋哲也「個に於ける普遍の真と存在——ボエティウス『イサゴージェ』第二註解』に於ける普遍論研究」東北哲学会『東北哲学会年報』第12号、一九九六年、一五—二八頁。
  - 10 最も初期の頃の著作だと目されている *Editio super Porphyrium* や *Disputata Porphyrii* また彼の論理字書の中にあつては後期のものとされる *Glossae super Porphyrium secundum vocales* や *Glossae super Porphyrium* を展開されている彼の解答には、今回の論考で立ち入ることはできない。前期著作に関して、註において、関連箇所と言及するだけにとどめることにする。  
 なお、アベラルドゥス著作の Dating に関しては、次の論文を参照。Constant J. MEWS, 'On Dating the Works of Peter Abelard,' in *Archives d'histoire doctrinale et littraire du moyen age*, 52 (1985), pp.73-134.
  - 11 彼は、自分自身が荷担する主張へと記述を進める前に、「一般的にどのよう受け取られているのか紹介するようである。初期著



作の *Editio super Porphyrium* においても次のような記述がまずある。

類や種は *subsistere* しているのか、即ち存在し(esse)ている、つまり存在を有している(habere esse)のか、それとも独立で  
むき出しで純粹な理解のうちに置かれているのか、即ち存在すると理解されるだけで、存在しはしないのかということに  
つて語るのを……(*Editio sup. Por.*, 5:5-8)

- 12 *Glossae sup. Por.*, 7:34-8:4:「第一の問いは次のようなものである。すなわち『類や種は *subsistere* しているか、それとも孤立の……うちに置かれるのか』これは言ってみれば、真の存在を有する(verum esse habere)のか、それともただ臆見(opinio)のうちのみあるのか、ということであろう。次に第二の問いは、『もしそれらが真に存在する(veraciter esse)と認められるとすると、それらは物的な存在者(essentia)かそれとも非物的なそれか』である。そして第三は、『それらは感覚対象となりうるものから切り離されてあるのかそれともそれらのうちに置かれているのか』である。事実、非物的なものには二つの種がある。即ち一方は感覚対象となりうるものなしでもそれ自身の非物性において永続する(permanere)ことができるもの(例えば神や魂)であり、もう一方は、それらがそのうちに在る感覚対象物なしには決して存在できないもの(例えば基体たる物体なくしては「存在し得ない」線)である。」

- 13 既に彼は『*Editio sup. Por.*』でも第一問を二分していた。 Cf. *Editio sup. Por.*, 5:12-27.  
14 初期著作の *Editio sup. Por.* において、第一問は言語の問題場面へと移されてはいたが、表示の問題は出てこず、範疇の場面で問題を扱おうとアベラルドゥスはしている。

「類や種に関して私は語るのを避ける」というのは、『*subsistere* しているのか、即ち実体(substantia)であるのか、それとも実体ではなくむしろ他の範疇に置かれるものであるのか、ということである。(*Editio sup. Por.*, 5:12-15)

- 15 *Glossae sup. Por.*, 28:16-19:「第二問題においても、同じことを言うことができる。つまり第二問は以下のような内容である。『「種類が」*subsistere* するならば物的かそれとも非物的か、これは即ち、*subsistere* するものを表示するとき、それらの表示する *subsistere* するものは物的であるのか、それとも非物的であるのか、である』。

- 16 *Glossae sup. Por.*, 28:23-31:「そしてさらに、『物的』は『個々別々の』と受け取られ得るので、次のように問われていることとなる。即ち、『「種類は」*subsistere* するものを表示するとき、それらは個々別々のものなのか、それとも個々別々でない

- 17 Boethius, *In Porphy. I*, 29: 19-22: 「實際、もし仮に何らかの時点でそれらが物理的であると明らかになっていたとすれば、非物理的なものだとして、感覚対象となり得るものから切り離されているのか結びついているのか」ということを問うのは、感覚対象となり得るもの自身が物体であるからには、不合理なこととならう」。
- 18 ポエティウスがプラトンとアリストテレスに見解の相違があることを指摘し (*In Porphy. II*, p. 167: 12-20) ており、それを受けてアペラルドゥスがその両者の調停を試みる箇所、彼は次のように言っている。
- つまり、ヌースのうちで物体から切り離されたものとして構成されるところの共通な概念をプラトンは普遍と理解し、しかもおそらくはアリストテレスとは違って、共通述定の働きに即して普遍を捉えはせず、むしろ複数のものの共通の類似に即して「普遍を捉えた」と…… (中略) …… プラトンはそのような natura が naturaliter にそれ自身で独立存在すると、つまり感覚に対する基体となっていないともその存在を保持するという仕方です。「存在すると」考える。そしてこのような仕方での naturale な存在を普遍的名称と呼んでゐる。( *Glossae sup. Por.*, 24: 7-22)
- 19 このような立場がアペラルドゥスの普遍論においてどのように位置づけられるか、その詳細に関しては次の拙論を参照。永嶋哲也「アペラルドゥスにおける「プラトニズム」について」、『中世思想研究』(中世哲学会)、一九九五年九月、第三七号、一〇一—一〇八頁。
- 20 本論考においては、ポエティウスとアペラルドゥスの普遍論を比べて、両者の違いを述べてきたが、もちろんそのような変化はいきなり劇的にアペラルドゥスによって引き起こされたのではないであろう。それは、アペラルドゥスの学説一般に関して諸研究がすでに明らかにしている通りである。それゆえ、本論考において指摘されたポエティウスにはなくてアペラルドゥスにある要素のうち、何がアペラルドゥス独自のものであり、何がそうでないかも明らかにする必要がある。だがこの問題に関する論究は、別の機会にゆだねなければならない。
- 21 彼はポルフュリオスの問いに答える前に行う予備的考察の最初の部分で、普遍と個に関して次のような定義を挙げる。
- ところでアリストテレスは『命題論』に於て普遍を「そもそも複数のものに述定されるに適しているもの」と定義している。

またポルフェリウスは個(singulare, id est individuum)を「一つのものだけに述定されるもの」と定義している。(Classae sup. Por., 9: 18-20)

そしてその後、述定されるvoxこそが普遍(あるいは個)であって、resがそうなのではないと論証している(Classae sup. Por., 10: 8-16: 22)。この場合、そもそも普遍がvoxであれば、非物理的であったり、ましてや感覚対象となる物のうちにあつたりできな

(平成八年度本学大学院博士課程修了・福岡県立大学非常勤講師)